

Title	パネルセッション2：オンラインで世界に開く日本の文化財
Sub Title	
Author	松田, 隆美(Matsuda, Takami) 本間, 友(Honma, Yū) カラーヌワット, タリン(Miyakita, Gōki) 宮北, 剛己
Publisher	慶應義塾大学デジタルメディア・コンテンツ統合研究センター
Publication year	2020
Jtitle	慶應義塾大学DMC紀要 (DMC review Keio University). Vol.7, No.1 (2020. 3) ,p.80- 88
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	特集 DMC研究センターシンポジウム第9回「大学教育のミライ： オープンエデュケーションのその先へ」これからのMOOCの話しよう 開催日時：2019年11月20日(水) 14:00～19:00 開催場所：慶應義塾大学日吉キャンパス来往舎2F大会議室
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=KO32002001-00000007-0080

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

パネルセッション2

オンラインで世界に開く日本の文化財

[パネリスト]

松田 隆美 (慶應義塾ミュージアム・コモンズ機構
長/慶應義塾大学文学部教授)

本間 友 (慶應義塾ミュージアム・コモンズ専任講
師/慶應義塾大学アート・センター所員)

カラヌワット・タリン (ROIS-DS 人文学オープン
データ共同利用センター、国立情報学研究所特
任助教)

[モデレータ]

宮北 剛己 (慶應義塾大学大学院政策・メディア研
究科特任助教/DMC 研究センター研究員)

宮北: では、少し時間が押しておりますが、皆さまと活発な議論をできればと思っております。まず、先生方のお話をお聞きした感想といたしまして、皆さまに共通しているのは、大学内にとどまらず、大学の「知」をどう「外」に、パブリックに教育していくかというところに、共通のチャレンジがあると思えました。いわゆるソーシャルインパクトですが、この裾野をどうやって広げていこうか、学内外でどのようにコラボレーションを誘発しようか、あるいは、いかにスキルを共有しようかというようなことです。私が一つ気になりましたのは、先ほどお話がありましたように、人文学系と情報学系と、今の大学の中は大きく二つに分ける傾

向があります。私自身は、全く別のデザインという分野なので、あまりそういうことは感じないのですが、そういうところでどのようなチャレンジがあるのかということ、皆さまにお聞きしたいと思います。



本間: これは、新しいミュージアム・コモンズでも行っていきたい挑戦なのですが、私は、今、慶應義塾大学の中でも比較的トラディショナルな三田におります。

宮北: そうですね。

本間: 三田にいますと、なかなか情報系の方と接することがないのです。タリンさんのお話の中に、翻刻みたいなものは、みんなでハードルを下げっていくのだ、様々な新しいエンカウンドに対してハードルを下げていくことだ、というようなお話がありましたが、ハードルを下げなければならないのは、おそらく学生や一般の方だけではなくて、既に大学で研究をしている研究者や教員だと思うのです。教員も初学者でありま

すので。



本間:どのように教員が、他の領域の実践に出会うチャンスを増やすのかというのは、やはり古い大学においては、とても重要なことなのです。先ほどのパネルディスカッションの中でも、ファカルティ・ディベロップメントが重要な役割を果たすという点に言及があったように、もっとその対象に、「知」に分け入っていかなければいけないのは、果たして大学の「外」だけなのかという問題もあると思います。

まず実践しないといけないのは、大学の「中」なのではないかと、私は思いました。

松田:私は、特に三田がトラディショナルだとは思わないのです。矢上は矢上でトラディショナルだし、SFC は SFC でトラディショナルです。

宮北:それぞれ、ということですね。

松田:それぞれのやり方というのがあって、

その起源をどこまでさかのぼれるかについては、大きく違うかもしれません。しかし、一つの方法論をずっと続けている限りにおいては、それぞれにトラディショナルになっているのではないかと思います。

宮北:なるほど。

松田:悪い意味でのトラディショナルを、相互の連携によって打ち破っていくことは、非常に重要なことだと思っています。



松田先生

MOOC に関わっていて常に悩むのは、作っていくコースがオープンであるので、非常に広い学習者を対象とすることになります。大学がそういうコースを制作するジレンマとしては、それがカルチャーコースのようになってしまう危惧があります。そこで、内容の専門性とは全く違うレベルの話として、いかにして一つの授業として成立させるかを考える必要があります、それは書物史のコースでも一番悩むところなのです。これは多分、永遠の課題だろうと思います。入口のハ

ハードルを低くすると、多様な学習者が関わられる可能性があります。同時に、先ほどのタリンさんのお話にありましたが、初学者の方は当然ながら様々なミスもします。それを手当てしていき環境づくりを同時にやらなければ、ただ情報を流しただけになってしまうと思います。発信したものをどう回収するかも含めて、その仕組みをこれから大学が考えていく必要があると思っています。



タリン先生

タリン：私にとって、MOOC は非常に大きなチャンスをも自分の人生に与えてくれたと思います。例えば、私のような源氏物語の研究者が、AI を研究しようと思ったとき、どこから始めればいいのかという、まずはMOOCを探そうと思いました。文学という自分の毎日やっている研究だけではなくて、様々な専門分野の講師の先生がたくさんいらっしゃいます。私にとってはいつでもMOOCでした。MOOCのような質の高い授業を受けることによって、自分の中に新しいものを生み出せることができたのではないかと思います。

ます。



宮北先生

宮北：ありがとうございます。確かにMOOCは、学ぶときの入り口として機能しています。ただ、そこにはある程度の質を担保しなければならないと思います。その点は永遠の課題とお話がありましたが、確かにどこまでどういう質を担保するのかというのは、難しいところだと思います。私もMOOCの開発をしていて、いつも思うところです。

本間：ハードルを下げるというときに、下げ方が、ただ下げるだけだと本当につまらないものになってしまう。その辺りのエッジをどうするか大学らしくて、一番、面白いところだと思います。

普段われわれが授業をやっている教室では、「ある程度の最低ラインはクリアしているよね、君たち」みたいな感じでやっていますが、じゃあ本当に広くといたときに、どう下げるのかというのが難しいところだと思います。

宮北：どこから教えたらいいか、というよう

なことですね。

本間: 私は、その観点から言うと、大川先生がおっしゃっていた、クラスルーム、授業や教室の価値を上げる、教室をもっと魅力的な場所にしていくという、いわゆる対面教育の役割を重視することにつながるのではないかと思います。新しいミュージアムで、デジタルプラットフォームを作って、オンラインにどんどんデジタル・オブジェクトを出していこう、あるいは、たくさんデータが出てうれしいというような話をしているのですが、そういう話をすればするほど、半面、このデータを使ってディスカッションをするためには、生身の人間同士のコミュニケーションが必要なのではないかと思います。リアルな場所でリアルなディスカッションをしていくプログラムと、そういうデジタルプラットフォームを組み合わせないと、うまく活用できて進んでいくイメージが出てこないのです。インターネットの海にものを投げても、何もエコーが返って



こないという感じです。ますます、物理的な

場所と物理的なプログラムの補充要請が感じられるというのが、最近、仕事をしていて実感とします。ハードルを下げ過ぎない。また、下げないことによってこぼれ落ちたものを、大学のリアルなプログラムはどのように拾っていくのかというのは、オンラインエデュケーション、オープンエデュケーションの枠内で話す面白いのではないかと思います。



宮北: そうですね。アナログ的には、実際の場で双方向にコミュニケーションをすることですが、それに関しては、ちょうど本日の質問受付にも、「双方コミュニケーションに関して、皆さまはどうお考えですか？」という質問がありました。アナログとデジタルのシームレスな連携とご講演内容にもございましたが、松田先生はいかがでしょうか。MOOC の中ですと「反転授業」と呼んでいますが、MOOC を活用して、実際の場でもどう教育に取り入れるか、そういったというような形の取り組みについて、ご意見をいただければと思います。

松田: 教室授業での MOOC の利用に関しては、

使えるところは積極的に使って行って、それによって授業のやり方のダイバーシティというか、多様性を出すと思います。多様性はそれだけで人を引き付けるものがあると思うのです。他のものを犠牲することなく多様性を出すことは、おそらくデジタルだから実現可能です。特に具体的に文化財を扱うコースを考えていると、デジタルの持っている可能性は追及していきたいと思います。レイヤーとして情報を重ねたり、物理的には並置できないものを並べることで、デジタルにはフィジカルを拡張する力がありますよね。

宮北：そうですね。



松田先生

松田：だからといって、デジタル環境が準備されれば誰でも新たな見方ができる訳ではありませんから、それをガイドしてゆく方法が重要になります。

ただ、「これについてディスカッションしてください」というだけでは、気分は盛り上がるかもしれませんが、それが学習者の思考

の方法論の向上につながるとは限りません。それができる方は、もしかすると、それ以前に既に何か学んでいるからこそ、新たな刺激でできるようになったのであって、オープンエデュケーションの成果かどうかは、やはり課題だと思います。



宮北先生

宮北：そうですね。確かに今回のシンポジウムのタイトルも『オープンエデュケーションのその先へ』と題していますが、その先に何があるのかというのは、いろいろ思うところがあります。皆さま、いかがでしょうか。会場の皆さまからご質問、コメントなどございましたら、お願いします。

会場質問（大川）：それぞれの先生のお話、ありがとうございました。非常に楽しかったです。タリンさんのお話で、敷居を低くすることで、グローバルに広がったからこそ「知が進んだのだ」という話が、すごく印象的でした。そういう意味では、専門的な先生方が、少し自分のレベルではないところに落とす、落とすと言ったら変なのですが、落とすことでグローバルになるというのは、

私も毎日実感しております。例えば日本語であれば 120 パーセント話せるのに、英語になると 80 パーセントぐらいしか話せない。でも、それだからこそ広がる何かがあって、それだからこそ得るものがあるので、あきらめつつ期待するというような感じですが、グローバルリレーションというのは、結構そういう感じのものだと思います。そこで、皆様はその文化財の専門家として、下げでグローバルにすることで得たいもの、得られそうなものはあるのでしょうか？

先ほどタリンさんは、全く日本語が話せない人を巻き込むことで、アルゴリズムが良くなったというお話をされました。では、敷居を低くすることが、単にその人数を増やせるというだけではなく、もっと違う何かがあるのではないかと感じたものですか、難しい質問で申し訳ないのですが、その期待の部分を共有したいと思い、質問させていただきます。

松田：おそらくこれは文化財に限らないと思いますが、対象物には、それに接近するための様々な切り口があり、それは専門家でも全て知り尽くしているわけでは決してないと思うのです。敷居を低くするとき、MOOC の場合、もう少し分かりやすく話す、あるいは適切な長さ、字数で言うことが大切だと思うのです。例えば、普通の授業ですと 100 でいいところを 120 話してしまい

ますが、MOOC なら 60 程度にするということです。一種のファカルティ・ディベロップメントとも言えますが、そうして、対象とする学習者の間口を広げたときに、全く自分が気付かない切り口での反応が返ってきて、それに専門家として反応することで、その学習者のために文化財の扉を開ける可能性があるわけです。「もの」だからこそ持っている予想のつかない部分に、気付いてもらえる可能性があるのではないかと思います。



本間先生

本間：私の担当のところ、ものすごく早口でお話した「オブジェクト・ベースド・ラーニング」なのですが、私とそのハードルを下げることによって期待したいのは、やはりモノをもう一度よく見るということに、みんなが戻ってきてほしいと思うのです。美術館関係者は皆様そうだと思うのですが、どんなにデジタル・オブジェクトだと言っているにしても、やはり本当のモノを見てほしいのです。とにかく美術館に来て。本当の作品に接してほしいというのが、もう最高の望みのはずなのです。一方で、われわれは、大

学で授業をやり、様々な作品に対する解釈や歴史の問題を扱っていますが、授業をすることによって、モノを見る、作品を見てその作品に対して何かを語るということを、怖いものにしてしまっているのではないかと思うことがあります。すごく偉そうなことを言わなければいけない、あるいは、カッコいいことを言わなければいけないというような「構え」を、生み出しているのではないかと。ただ、そうではなくて、まず真摯にモノを見ていき、その対象と自分の中の関心を結び付けていくことが、美術史であれ、考古学であれ、出発点なのだということを分かってもらうのが、すごく重要なことだと思います。少々質問とずれてしまいましたが、そういう意味で、ハードルをまず下げることによって、モノを見るというところに戻るのには、われわれの領域にとっては、本質的な問題に直結してくるのではないかと思います。

タリン：私からはまず、補足のコメントです。Kaggle コンペティションについて、先ほど説明していなかったのですが、なぜ開催したのかといいますと、(最近、日本古典文学専門の人たちで話題になったのですが)「なぜ古典が必要なのか」という質問がた



タリン先生

くさん出てきて、私はそれを見て正直すごく嫌な気持ちになったからです。こんなにいいものなのに、面白いものなのに、どうして必要ないと思ってしまうの？ それならば、もし、様々な人が参加するようになれば、大事にしてもらえるようになるの？ と思ったのです。実は日本古典籍を、デジタル化してオンラインで公開するという事は、最近始まった話ではなくて、もうずっと前からあったのです。でも、利用する人がどのくらいいるのかというと、やはり研究者ばかりなのです。こんなにたくさんの、数百万という古典籍が国の中に残っていて、平安時代から 1000 年も使っているくずし字なのに、ずっと使われてきたのにもかかわらず、1000 年分の本を誰も読めないという現実には、どうすればいいのかと思ったのです。だからもし、今まで皆さんにとって遠い存在にあった古典籍が読めるようになったら、もっと身近なものとして感じてもらえて、大事にしてもらえるのではないかと、このプロジェクトを開始しました。ですか

ら、ハードルを低くすることが、やはり日本の文化財を守ることにもつながるのではないかと思います。

宮北: ありがとうございます。今、日本の文化財を守るというお話がありました。確かに皆さまの取り組みを通じて、本来は見るできない大学コレクションや、あまり大勢の人には興味をもってもらえないコレクションが、表に出て、たくさんの人に触れてもらえます。デジタルを使っているいろいろな角度から見てもらえるというのが、これからのデジタル化や、「オープンエデュケーションのその先」に行ける可能性の一つになるのではないかと思います。拙い一言になってしまいましたが、そのように感じました。

それでは、時間も少し延びてしまっていますが、皆さまから最後に今後のデジタルの展望や今後の予定などについて、一言お願いしたいと思います。

松田: 大英図書館と共同の書物史コースというのを、来年の夏に向けて頑張ってお作りします。そのときにはぜひオリンピックの合間に見ただけられるように、恥ずかしくないものを作りたいと思っております。

本間: 私の場合、お悩み相談になるのですが、新しいミュージアム以外にもいろいろ

なプロジェクトに手を出しておりまして、その中に地域の文化資源をオープンにしていこうということもやっております。このプロジェクトの悩みは、講義には人が集まらないのに、ツアーには人が集まる、ということです。つまり、見学会にばかり人が集まるという問題を抱えているのです。見学会というのは30人ぐらいなのですが、かなり少ない人数でお寺や文化施設にお邪魔したりするものなので、見学会では、われわれのやっているコンテンツを届けられる相手が限定的になってしまう。そこで、なにか良い方法がないかと思っているのですが、オープンエデュケーション的なところで手広く講義をやろうとすると、人は来ない。見学会には人をたくさん入れられない…。この辺の難しさを解決してくれる方法を募集中です。よろしくお願いします。

タリン: 私はやはり MOOC が非常に大事だと思います。今の時代は勉強したいことがあれば何でも勉強できる時代になったので、MOOC をできるだけ活用して、自分の新たな研究課題を見つけることができたらいいなと思います。ありがとうございました。

宮北: 皆さま、どうもありがとうございました。それではパネルセッション 2 は以上で終わりますが、BL の展示、KeMCo のポスター展示もありますし、タリンさんにはこの

後も引き続きデモなどでお話しいただける機会もあるかと思いますので、ディスカッションを追って続けられればと思っております。ありがとうございました。